

法学部

問1

解答例

19世紀後半にグローバル化が始まり、世界各地のつながりが進行して混血化が進んだが、これに対する不安感を反映した「純血主義」や人種排斥など、グローバリゼーションの流れに矛盾する反動が起こった。このように19世紀後半から20世紀前半にかけてのグローバル化は、反グローバリゼーションの要素を持っていた。これに対して、現代世界のグローバル化では、ヒトやモノの交流がより徹底し、世界各地の距離が縮まり、雑種的な生活様式やものの見方が生まれて、人種や文化などさまざまな領域での混血化が進んでいる。こうした動きへの反動もやがて例外化し、自分と他者の境界が取り外され一つの地球としてのアイデンティティのみが残るだろう。

問2

解答例その1

筆者が「惑星意識」の重要性を説く理由は、この数十年のグローバル化の歴史の中で、国境で分断された人類ではなく、同じ星に生息し同じ宇宙に存在するものとしての人間という考えが生まれるとともに、自然と人間との交流を無視せずに、動植物や自然環境なども同じ惑星に存在するものとして人間と共生共存していかなくてはならないという認識が生まれてきたからである。そしてそのような意識が徹底した社会では、人権の抑圧や国家間の対立が見られなくなり、大気、海、河川などの保護、動植物の「権利」などが実現するだろう。

ここでは、動植物の「権利」を例にとろう。

元来、動植物は人間の衣食住の対象として利用される「もの」であって、権利の主体ではないとされてきた。権利は人間の側にあり、「もの」としての動植物にはない。そして、そのような「権利」観をもとにして、科学技術は動植物の利用、自然環境の開発を進めてきたのが近代・現代の歴史であろう。

ところが20世紀後半には、日本をはじめとする先進諸国に深刻な環境破壊・環境汚染が見られるようになった。この事態は人間の健康を害したばかりか、動植物の中には絶滅の危機に瀕するものまで現れるに至っている。

こうしたことに対する反省から、水俣病を告発する『苦海浄土』にうかがえるように動植物との共生の思想が生まれてくるのだろう。また、辺野古基地建設のための開発で環境破壊が生じ、ジュゴンの生存が危うくなるとして、ジュゴンの「権利」が主張されている。こうして、動植物を利用する権利をもつのは人間だけだという人間中心主義を脱して、動植物・自然にも「権利」があると考ええるような社会になるだろう。

法学部

解答例その2

現在深刻化する環境問題もエネルギー問題も人類全体、世界全体の問題だ。持続可能な発展もエネルギーの確保も地球に生息する動植物、空気、水、そして人間の生存を前提とする。「惑星意識」は「惑星の一つとしての地球」というイメージがもたらした見方だ。それは、国境で分断された人類でなく同じ惑星に存在し人間という考え、自然環境とも共生すべきだという認識へとつながる。そして現在の人権抑圧や国家間対立にもかかわらず、もはや、ここまでたどり着いた世界が以前の世界に逆行しえないことを示し、これまでの人権意識の高揚とも合流しトランスナショナルな活動を進める上で重要だ。

今日、地球温暖化防止キャンペーンが繰り返されている。地球温暖化は、人間活動から排出されたCO₂などが温室効果ガスとなって生じるという原理で説明される。確かにそこには人類のあり方への反省がある。持続可能な発展のためには、人間が同じ惑星の中で自然環境と共生すべきだといった、惑星意識と通じるフレーズも繰り返される。

しかし、思い出したいのは福島第一原発事故のことだ。私たちは、原発には「原子力ムラ」と呼ばれる、政治家・官僚・産業界・学界・マスコミなどのとてつもない利権が群がっていることを知った。その観点から捉え直せば、温暖化防止の大合唱も、再生可能エネルギーの普及を新たな利権とする者たちや、「発電時にCO₂を排出しない」ことを謳って原発を推進し続けたい勢力にとって格好の商売道具になっている面がある。人為的CO₂原因説を懐疑する科学者らが、そのために異端視されてきたとしたら問題だ。

原発事故後の節電の広がりや、一時的ではあったが、そのとき私たちは、いかに大量生産・大量消費社会を脱却しエネルギーに依存しない社会をつくるかを展望しようとしていた。それを忘れないことこそ人間と自然の共生としての惑星意識を徹底する道だ。

解答例その3

「惑星意識」と呼ばれる見方は、同じ星に生息し、同じ宇宙に存在するものとしての人間という考え方につながる。それは人権運動の高揚とも合流し、国境を越えたトランスナショナルな活動を一層進める。動植物や自然環境などとの共生共存、第三世界への対応、そして全地球的なエネルギー問題に対応するためにも必要である。ひいては人間にとって極めて重要な、グローバル化の今後を示唆するこの考え方は、私たちの住むローカルなところから、すでに見られることである。

私の住む愛知県豊田市は外国人の集住率が全国的にも高いことで知られる。ほとんどが労働者として日本にやってきたが、当初は日本人との間にトラブルが絶えず、相互不信の中で地域が分断しかねないこともあった。だが近年、自然災害に対する共通した利害の意識が芽生えたことをきっかけに、外国人と日本人による自助組織の設立が増え、ともに自然と向き合うことを通して防災など共生に向けた地域の課題が議論され始めた。

法学部

現在では、教育や福祉、地域単位での資源やエネルギーなど生活環境や自然環境を共に守る動きがある。そうした活動を通して同じ生活上の問題を発見した外国人と日本人のカップルも何例も誕生し、相互交流だけでなく、相互依存の感覚が人々に広がる。彼らにとって大事なものは双方の利益や街の発展ではなく、次の世代へと続く持続可能な社会の形成なのだ。

こうした試みは、現代のグローバル化がローカルな価値の創出のなかで進んでいる好例と言えるのではないだろうか。当初は民族意識、国民意識に縛られていた人々が、自然とのかかわりを契機に地域社会でそれらの縛りを解き始めたことで交流を進め、その過程でコミュニティ独自の価値が生成する。筆者の言う惑星意識が徹底した世界とは、こうしたローカルな社会を単位とした無数のネットワークが細胞組織として地球を網の目のように覆った世界ではないか。